

矢板 希望の星

職人の世界は、いまだに厳しい修行が必要とされる。

石材店も、そんな職種のひとつだ。

その石材店の四代目に生まれ、ものごころ付いたときには、すでに家業を継ぐと決めていたという井上洗太さん。

父親の死、東日本大震災という困難を、多くの人に助けられながら乗り切ってきた。

●石のまち岡崎での修行は背水の陣

父親は口では言わなかったけれど、跡を継がせる気はなかったようです。「休みもな、いつも仕事ばかりで収入も安定しないから…」

丁寧な仕事と感謝の心で 地域に密着した石材店を



こうた 井上洗太さん(26歳)

上太田の井上石材店四代目。高一で中退。愛知県岡崎市にある石工団地の養成工として、全国から集まる石工志望の仲間と3年半修行。実地を学びながら、夜は岡崎技術工学院石材科で学び、19歳で矢板に戻り家業に就く。

しかし、勉強があまり好きではなく、祖父や父の仕事ぶりを見ながら育ち、自分は石屋になると決めていたの、高一で中退。茨城、香川に並ぶ御影石の産地、愛知県岡崎市で修行することにしました。

生の更生が目的で親元を離れて修行している人もいました。石工の修行は手取り足取り教えてくれるのではなく、「体で覚えろ」「見て覚えろ」というやり方。厳しくて同期生が次々と辞めていき

ましたが、「ここで帰ったら後がない、高校も中退して中途半端に終わってしまう。ここで頑張らなければ石屋になれない」と自分に言い聞かせました。

矢板市内の同業者に手伝ってもらったり、教えてもらいながら、現場のことを覚えていきました。皆さんに助けってもらいました。「分らないことは何でも聞いてくれ」と言ってくれて、本当にありがたかったです。

●突然の東日本大震災 矢板市内も、墓や石蔵、石塀など大きな被害があり、どこの石屋さんも大忙しで人手も足りない状態です。うちも、お得意様や付近の方々に仕事を頼まれ、母と二人ではその要望に応えられない

ため、休業時代の友人たちに応援を頼みました。広島県と千葉県から三人、約一カ月ほど手伝いに来てくれて大助かりでしたが、また、その震災の仕事が後二年分ぐらい残っています。また、この震災で父と一緒に自分が作ったお墓が倒れなかったことで、お客様からお礼の電話が何件もあり、これから仕事を続ける上での自信につながりました。



●石工としての技術をいつまでも中国産の安い石材が入ってくるわけではないと思いたいです。いつかはまた、国産の石を自分で切断し、磨き、刻んでいく技術が必要になってくると思うので、いずれ石材加工一級技能士の国家資格を取りたいと思っています。石材組合に入らないとその受験資格が得られないのですが、



(K・H)